

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月10日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520365

研究課題名（和文）

「友情」の記録—漢～中唐における唱和集の編纂—

研究課題名（英文） Compilation of the collections of Changhe poems — From the Han Dynasty to Mid-Tang—

研究代表者

橘 英範 (HIDENORI TACHIBANA)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：60236544

研究成果の概要（和文）：本研究は、漢から中唐期に至るまでの唱和集の編纂の歴史的展開を解明した。特に、陳の『文會詩』について初めての本格的な検討を行い、また、王維の『輞川集』を唱和集として読むことにより、従来と異なった見方を提示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I make clear the historical development of compilation of the collections of change poems from the Han dynasty to Mid-Tang. Especially, I make the first authentic research about “*Wenhui shi*” of the Chen dynasty, and I present a new viewpoint about Wang Wei’s “*Wangchuan ji*”, by reading it as a collection of change poems.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：中国文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：唱和詩・唱和集・六朝詩・唐詩

1. 研究開始当初の背景

唱和詩は、友情を重要なテーマの一つとする中国古典詩において、贈答詩と同じく、その友情が極めて端的に表現されるものであり、これまで日中両国においてさまざまな研究が蓄積されているが、その一方で唱和詩を詩集の形にまとめた唱和集については、ほとんど研究がなされていなかった。しかし、詩の唱和が盛んに行われた梁の時代に、唱和集の編纂はほとんど行われていないという事実が物語るように、詩の唱和と唱和集編纂とは必ず

しもシンクロナイズしていないのである。そこで、唱和集を編纂するという行為の方に着目し、唱和集編纂の歴史的展開についての解明を試みんとしたのが本研究である。

2. 研究の目的

文学作品の唱和や贈答自体は、大変古くから行われていたが、やがてそれを集の形にまとめることが行われるようになり、時代が降るにしたがって、それは次第に盛んになっていく。その一つのピークとなるのが、中唐元

和期の劉禹錫と白居易による『劉白唱和集』である。『劉白唱和集』に至るまでの唱和詩の研究は多いが、唱和集の編纂という行為に着目して、『劉白唱和集』への流れを考察した研究は行われていなかった。そこで本研究では、この『劉白唱和集』に至るまでの、唱和集編纂の歴史的展開を明らかにすることを目的とした。そのうち、漢～梁までの唱和集については、研究代表者がすでに基礎的な研究を行っていたので、陳以降の唱和集を主要な対象とした。

3. 研究の方法

(1) まず、これまでに研究代表者が行ってきた漢～梁までの基礎的な研究について、近年日中両国で進められてきた研究成果を取り入れて、補訂する作業を行った。

(2) その一方で、陳以降の唱和集について、下記の作業を行った。

- ①書目類を調査して唱和集の編纂と流行の状況を確認する。
- ②唱和集に関連した文学者の伝記や年譜等の資料を調査し、唱和の時期を考察する。
- ③唱和集に関連した文学者の残した作品を調査し、唱和の傾向や実態を考察する。
- ④残された唱和詩を読むことにより、唱和集の特色を明らかにする。

4. 研究成果

本研究課題の成果について、特筆すべき二つの成果を中心に記述する。

(1) 陳の『文會詩』について

陳の徐伯陽の『文會詩』は、唐代の書目にも見え、唐代にも残っていて中唐の詩人たちにとって唱和集の手本となっていたことが推測されるとともに、『陳書』徐伯陽伝の記述によれば、唱和詩の制作者たち自身が唱和集

を編纂していること・一度きりの宴会ではなく、複数回行われた遊宴での作品が収められていたことが分かり、中唐期の唱和集の先駆的存在であることがうかがえる。このような貴重な唱和集であるが、残念ながらすでに散佚してしまっているためもあってか、この『文會詩』についての研究はほとんどなされていなかった。そこで、初めて全面的な研究を行い、次のような点を明らかにした。

陳代の文学者の動向に関して、少なからぬ新見を提示し、当該分野の今後の研究に基礎的な寄与を行うものになったと思われる。

①参加者の伝記資料を詳細に調査した上で比較検討することにより、従来もっと漠然と考えられてきた文会の開催されていた時期と唱和集編纂時期について、より具体的にすることができた。すなわち、文会の開始の時期は、数年ぶりに張正見が鄱陽王に従って都に帰り、徐伯陽・張正見・阮卓・馬樞といった主要メンバーが揃った太建元年（569）であり、太康三～四年（571～572）頃、南康嗣王の広州刺史着任にともなって徐伯陽が都を去ることになった時に、大切な思い出を記録する意味も込めて、詩集の編纂が行われたと思われる。

なお、この調査に付随して、徐伯陽が太建七年（575）に新安王に仕えることになったのは、天康元年（566）から太建三年（571）以降頃までずっと新安王に仕えた阮卓の推挙があった可能性を指摘したり、従来はより幅広く考えられていた張正見の卒年の範囲を限定したりするなど、各詩人の伝記研究の細かい点を補足する成果も多く得られた。

②従来明らかにされていなかった文会の状況について明らかにすることができた。すなわち、阮卓がメンバーに加わったのが、南徐州で彼に出会った馬樞の紹介によること、

隠棲中の山から馬樞が都に出てくる機会に合わせて開かれていたであろうこと、官位はそう高くないが、気心の知れた友人たちの高雅な集まりであったこと、それがやがて評判になり、若い文人たちも新たに加わるようになっていくこと、などである。

③現存する各詩人の詩を検討することによって、『文會詩』に収められた作品の考証を行った。すなわち現存する詩を検討して文会における作であるかどうかを推定し、従来の研究では文会における詩だったかどうか不明とされたものや、文会の詩でないとしていたものを文会の作とし、また従来の研究で文会の作とされていたもので、誤りと思われるものを除いた。これにより、唱和詩集『文會詩』の性質をより明確にすることができた。

(2) 王維『輞川集』について

盛唐の大詩人・王維の代表作とされる「鹿柴」「竹里館」「辛夷塢」等が収められる『輞川集』は、単に王維の作だけでなく、裴迪の同題の詩も付せられたものであり、つまり唱和集の形態をとっているのだが、従来、『輞川集』を唱和集として読む試みはほとんどなされていなかった。そこで、まず『輞川集』の唱和の実態に関して調査した上で、『輞川集』を王維と裴迪の唱和集であるという角度から読み直すことを試み、以下の点について明らかにした。

今後の『輞川集』研究および裴迪評価に対して、新たな視点を提供するものとなったと思われる。

①実際は唱和の実態については不明であり、裴迪の原唱に王維が和した可能性がある作品も含まれているのだが、後世の人々は、王維の原唱に裴迪が和したと考えていたことをま

ず確認した。

従来の研究では、漠然と王維の作品に裴迪が和したと考えられてきていたが、最近、裴迪の作品に王維が和した可能性を指摘した研究が登場したことを承け、実際には他にも裴迪の方が原唱と考える作品があることを指摘した。その上で、『輞川集』の唱和の実態に関する資料を検討し、後の時代の人々は、王維の原唱に裴迪が唱和した詩集と考えていたことを明らかにし、後の時代の人の目から見た唱和集という観点からの考察が可能であることを指摘した。

②以上で指摘した観点により、後の時代の人から見た唱和集として『輞川集』を読み直したところ、従来王維の詩と単純に比較され、稚拙であるという評価で片付けられてきた裴迪の作品が、実は裴迪なりの工夫に満ちたものであり、そしてそれが王維の詩作にも大きな影響を与えていることを明らかにした。

王維の原唱に裴迪が和したという観点から読み直すことにより明らかにできた裴迪の主な工夫は、次のようなものである。

- ・王維が心情を直接・明確に表現するのに対し、裴迪は暗示する
 - ・王維が心情を暗示するのに対し、裴迪は直接・明確に表現する
 - ・王維の作が詩題から離れるのに対し、裴迪は詩題に即して詠ずる
 - ・王維の作が詩題に即して詠ずるのに対し、裴迪は詩題から離れる
 - ・王維の作に見られない感覚表現・景物・行動などを付け加える
 - ・王維の作に見られる他の登場人物等を省く
 - ・王維の作に見られる特徴的な表現を変える
- そして、例えば王維が詩題に即した作を作ったのに対し、裴迪が詩題から離れた作品を作っていたのを、王維が裴迪の手法を取り入

れて、詩題から離れるようになったという流れから、代表作とされる「鹿柴」が生み出された形になっているなど、王維の方もこれらの工夫に大きく影響を受けたように読めることを指摘した。

(3)その他

関連する研究として、従来行っていたが事情により中断していた劉白の聯句の訳注を再開し、「西池送白二十二東歸兼寄令狐相公聯句」に訳注を施した。続稿も準備しており、今後とも連載を継続する予定である。

すでに出版されている柴格朗氏『劉白唱和集』（勉誠出版、2004年）に含まれる訳注に、より詳細な用例と語釈を付け加えて提供するものとなっていると思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 橘英範、唱和集としての『鞆川集』、中国文史論叢、査読無、第9号、2013、pp. 1-58
- ② 橘英範、劉白聯句訳注稿（十四）、岡山大学文学部紀要、査読無、第57号、2012、pp. 105-116
- ③ 橘英範、陳代の唱和集—『文會詩』について、中国文史論叢、査読無、第7号、2011、pp. 153-178

〔学会発表〕（計1件）

- ① 橘英範、唱和集としての『鞆川集』、中国中世文学会平成24年度研究大会、2012年10月20日、広島大学文学部

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

(1)研究代表者

橘 英範 (TACHIBANA HIDENORI)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：60236544

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：